

市長はすべからく変態たれ

こなん
湖南市長(滋賀県) 谷畑英吾
Eigo Tanihata



自覚者が責任者

全国市長会創立120周年記念・第88回全国市長会議で本会副会長就任時に「自覚者が責任者」というお話をさせていただきました。

これは、自覚者、すなわち気が付いた者が責任を持って取り組まなければ、誰かがやるだろうと思っても誰もやるわけねえじゃねえか。自覚、すなわち気が付いちまったお前さんが悪いんだから、最後まで責任を持って取り組めよ、ということです。

このことを遺した糸賀一雄は、まだ戦後の混乱間もない昭和21年に、浮浪児狩りの対象とされた戦災孤児や知的障がい児等に対して、入所、教育、医療を行う施設として近江学園を創設しました。



糸賀一雄先生と子どもたち～近江学園前～(1947年)

糸賀にとって、大人が起こした戦争で子どもが「狩り」の対象にされている現実が我慢ならなかったのです。

そして、たとえ重度の障がい児であっても人間としての生命の展開を支えることが重要であると、「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」と唱え、大人社会が子どもたちの発達をしっかりと保障していかなければならないと自ら率先垂範していきました。

その過程で、四六時中勤務、耐乏の生活、不断の研究というモットーとともに生み出されたのが「自覚者が責任者」でした。近江学園は、現在湖南市に立地しており、糸賀思想を体現した後継者が市内にはたくさんおられます。

そうした素地があるため、措置から自立支援へ、発達支援システムの構築、障がいと就労、障がいと芸術、障がいと自然エネルギーなど、新しくて面白い施策が湖南市でどんどんと生み出され、発信されているのはうれしいことです。

ホンノムシ

さて、今年のお盆休みは夏風邪にかか、1週間ほど病床で過ごしたため、毎年恒例の下鴨納涼古本まつりに行けませんでした。世界文化遺産・下鴨神社社の森で80万



自宅の本棚(もちろん一部!)

冊が即売される古本市には毎年訪れているのでとても残念でした。

こういう古本の森を掻き分けて記録の山に一步足を踏み入れてしまうと、時間の過ぎるのだけではなく、我をも忘れてしまいます。

以前、500円均一コーナーで平凡社の『東郷平八郎全集』全3巻(昭和5年)を掘り出したときには、思わず一人ほくそ笑んだものです。こういう乱暴な値付けは、神保町の店ではそうそう見つけることができません。

濱口雄幸の『随感録』(三省堂・昭和6年)

も古本市で出会いましたが、政治家を志す元となったのも、中学1年の時に読んだ城山三郎の『男子の本懐』でしたので、古びた書架にこれを最初に見つけたときには、まさに本懐ですぐに飛びつきました。しかし、その後、古本屋通いのうちに、この日記もかなり出回っているものだなと気がついたこともありました。

昭和5年の課題のひとつはロンドン海軍軍縮条約でした。その批准については10月1日によりやく枢密院で「裁決ノ結果満場一致可決」され、翌2日「午後二時三十五分条約御批准アラセラル」となりましたが、



株アニプレックスプロデューサーと『はたらく細胞』について熱談する筆者（左側）

政治情勢から3日には海軍大臣更迭となります。ここで、濱口は後任海相に安保清種大将の内諾を得、「直ニ東郷元帥ヲ訪ヒ、其同意ヲ得テ九時半頃確定的ニ就任承諾ノ旨ヲ答フ」と日記に書きつけました。ほら、こんなところで東郷と濱口が出会ったでしょう。

その濱口が右翼の凶弾に倒れた後、満州事変が起こります。関東軍の暴走ですが、これに朝鮮軍が呼応したことはあまり知られていません。当時は越境將軍ともてはやされた林銑十郎も日記を遺しています。

『満州事件日誌』（みずす書房）では、事変不拡大を方針とする中央部に対し、当時は勅命が必要だった軍の外征を独断で行う際の心情を「大命ヲ待ツコト無ク越江ヲ命ジタルハ恐懼ニ堪ヘサルモ」、「司令官個人ノ毀譽ノ如キハ問フ処ニアラサルベク」とその覚悟を昭和6年9月21日の日記に吐き出しています。

『高松宮日記』や『西園寺公と政局』、『木戸日記』など宮中関係、『近衛日記』や『芦田均日記』、『大木日記』など政界関係、『戦藻録』や『高木惣吉日記』、『大本営陸軍部戦争指導班機密戦争日誌』など軍事関係、『無声戦争日記』や『敗戦日記』（高見順）など民間でも、記録好きな日本人は、日記文学とも呼べるほど日記を遺しています。

こうした記録を丹念に読み込み、往時の苦労を振り返っていると、日ごろのストレ

スから解放されるのです。ちょっと変態的ですね。

サブカル市長

変態的といえば、学生時代はヲタク的な生活をしていましたので、今でもその余韻は残していると思います。古書漁りもそうですが、漫画やアニメ、サブカルチャーなどには幅広く興味を持って接しています。

私たちの子どものころはテレビ全盛期でしたので当然テレビっ子でしたし、今はそんな余裕ありませんが、当時は漫画も片っ端から読んでいました。ヲタクの仲間入りをしなかったのは、コミケに行く電車賃がなかったからでしょう。

しかし、三つ子の魂百まで、成人後もさまざまな情報には接してきたつもりです。ネットでの発信もそのひとつですし、最新のアニメもできる限りカバーしているつもりです。

そうしたなか、先日は、清水茜先生原作の『はたらく細胞』講談社というアニメとコラボもさせていただきました。クールジャパンなどというまでもなく、これからの地方自治にはこうした最先端かつニッチを捉えるセンスも不可欠だと思います。

大のお笑い好きでもありますので、興行各社ともよいお付き合いをさせていただきながら、くだらなくて面白いまちづくりを日々邁進しています。おしまい。